5万トン時代へ

青森リンゴ輸出

11

自由化で新規取引拡大

台湾向けの道開いた「建隆」

2002年の台湾のWTO（世界貿易機関）加盟によって、台湾向けリンゴ輸出が劇的に増加したことは、前号で報告した通りであるが、実は輸入割当制から自由貿易への移行が、現在の輸出3万トンへの引き金になっていると筆者は考えている。

台湾は1981年から日本産リンゴの輸入枠を設定していて、当初は400トン、97年から2千トンに拡大し、2001年12月まで割当制を維持していた。

台湾側の輸入枠は、台湾政府の財政部中央信託局で入札にかけられ、台湾の貿易業者が競って落札していたが、中でも強力な貿易業者が建隆コーポレーションだ。最終的には落札に日本円で数億円もかかると、建隆の社長・穎川建忠さん（94）から聞かされた。

穎川さんは、2002年度、外国出身者としては初めて青森りんご勲章を受章している。建隆は台湾・台北市と日本の神戸市に本拠を置く青果物貿易商で、青森リンゴの台湾輸出への道を切り開き、国際的評価の向上に貢献した。

台湾・台中市で開催された「青森りんご輸出情報交換会」であいさつする建隆コーポレーションの穎川建忠社長＝2012年10月

青森リンゴの輸入枠は事実上、建隆に独占されていて、台湾で青森リンゴを販売しようとすれば、必ず建隆を通さなければならない状態になっていた。ちなみに、日本側の輸出枠配分は、県りんご輸出協会と県りんご共販協同組合が担っていた。

約20年間続いた台湾の日本リンゴ輸入枠制度だが、台湾のWTO加盟によって、全くの自由貿易に変更され、それとともに、それまで輸入枠の入札に負けていた他の青果物貿易業者が一気に青森リンゴに新規参入して来た。

これまで扱いたくても入札の壁で扱えなかった青森リンゴが誰でも自由に扱えるようになった。これが3万トンまで拡大してきた重要な背景と見ている。

その後、円安や香港市場の拡大、トキなど黄色系品種の人気で、輸出期間が拡大するなど青森リンゴ輸出に追い風が吹いて、関係者もびっくりするほど輸出量が拡大したのである。

（県りんご輸出協会事務局長　深澤守）